

県医療功労賞 三原、石口さん

地域医療に長年にわたって貢献した人をたたえる第38回医療功労賞(読売新聞社主催、厚生労働省など後援、エーザイ協賛)の広島県医療功労賞に、神石高原町下豊松の豊仁会三原医院理事長、三原昭美さん(74)と、広島市中区のYMCA訪問看護ステーション・ピース所長、石口房子さん(57)が選ばれた。表彰式は2月9日、広島市で行われる。

豊仁会三原医院理事長

三原 昭美さん

(神石高原町下豊松)



「元気にやってこられたのは家族のおかげ」と話す三原さん

地域支え半世紀

山あいにある神石高原町豊松地区で半世紀近く、子どもからお年寄りまで、住民の健康を守ってきた。「コツコツと元気にやってこられたのは、家族のおかげ」

と目を細める。祖父の代から続く開業医。日本大医学部を卒業後、1961年に岡山大医学部第1外科に入局。福山市内の病院に出張するなどして

いたが、63年10月に父・徳美さんが55歳で急逝したため、医院を継いだ。常に自分一人だけで治療出来るか、冷静に判断するように心掛けている。医院を継いだ当時は地元で救急車がなかったため、心臓病の女性患者を自分の車に乗せて福山市内の病院まで運

び、命を守ったこともあったという。過疎高齢化が進む豊松地区で唯一の開業医。医院での外来診療を終えると、午後3時半からは地区内の往診に出掛ける。診療器具や本がぎっしりと詰まった診

YMCA訪問看護ステーション
ピース所長

石口 房子さん

(広島市中区)



「在宅ホスピスについての情報提供には貢献できた」と振り返る石口さん

在宅ホスピス取り組み

「個人の意思が尊重され、最期まで納得のいく人生を送ることが出来る環境作りに取り組みたい」。末期がん患者らのサポートなどに長年、取り組んできた。岡山県津山市出身。結婚を機に30歳で広島市に移り住み、病院で保健師として訪問看護に携わるようになった。当時、対象は病気が中

心だったが、在宅で医療が満足に受けられる体制が整備されておらず、「自宅で最期を迎えたい」という高齢者らの思いがかなえられないことに限界を感じた。病院を辞めて1995年、「広島・ホスピスケアをすすめる会」を結成、県内にはなかった緩和ケア病棟の整備を求める署名活動や市民向けの啓発に携わる

一方、96年に訪問看護ステーションを設立。主治医らと連携して在宅ホスピスにも取り組んできた。毎日のように現場に出て、患者や家族らの話に耳を傾けている。「終末期の患者さんだけでなく、障害者や難病の人たちも地域で支えられる仕組みができれば」と思いは膨らむ。「医療や看護に携わる者は、橋渡し役として地域作りにもっと貢献できると思う」と自分に言い聞かせている。

療かばんは、傷みが激しく、毎年のように買い替えるという。「これも、もう何十代目です」と照れ笑いを浮かべる。患者の中には3代にわたって診察している住民もあり、知った顔が多い。

既往症や家族構成など、あらゆるデータは「頭の中のカルテに入っている」という。「人命を預かるので、これからも、それにふさわしいレベルの診療を心掛けたい」と力を込める。